

私がなぜ現在の科目を選んだか

## 「整形外科」

信州大学医学部運動機能学講座

天 正 恵 治

私が自分の専門科を決めたのは大学6年の11月頃だったように思います。皆と同じように色々な科の勧誘を受け迷ったうえで現在の科を選択しました。元々整形に強い興味があった訳でもなく、大きな怪我をしてお世話になったことも特になく、そして別段整形から強い勧誘を受けた訳でもない私がこの科を一生捧げる専門として選んだ理由は今考えても特に思い当たらず、何となくその時の流れで決めたような気がします。同級生からも意外だとよく言われたものです。という訳で入局した当初はあまり整形外科に対する興味が持てず、気管送管をしたり、IVHを入れたり、色々な薬剤を使って患者の生死の狭間で頑張っている同期の仲間が何となくうらやましくも感じていました。何か物足りなく自分の判断は間違っていたかな?と感じた

私がなぜ現在の科目を選んだか

時期もありました。実際卒業して14年近く経過し私は今下肢関節の障害を持った患者さんに対する様々な治療を行っています。当時よりも整形外科に対する知識も興味も増して頭の中はすっかり筋肉化し、身も心も整形外科医といった感じです。今の科が自分に適していたのかどうかは医者を辞める間際にならないと本当のことは分からないのかと思います。しかし、今の時点で思うことはどの科を選ぶかということよりも自分の選択した科(分野)に対して興味を持っていかに関心を持って注いで頑張る努力するかということの方がはるかに重要だと感じています。当たり前のことなかもしれませんが、これは周りの医師を見てもそう感じます。そういった点で私は整形外科という専門科を通して患者さんと関わり治療を行い、また自分の技術を磨くために切磋琢磨できる状況には満足しており整形外科を選んでよかったなと日々感じている毎日です。現在初期研修医の先生たちと接する機会も多く、彼らが専門科の選択や進路で悩んでいる姿をよく目にします。そういった若い先生方にも1つのアドバイスとして参考にしてもらえれば幸いです。

(信大平9年卒)

## 「腎臓内科」

上田腎臓クリニック

塚 田 渉

自分は学生時代に、腎臓に興味を持っていたとか透析療法に熱意を抱いていたといったことはなく、むしろ腎臓病理や透析の原理などは正直理解できずに医師国家試験に臨みました(半ば出題されたら終わりという気持ちで)。自分が腎臓内科専門ですということを他の医師に告げると『頭良いのですね』『勉強好きなのですね』といったいわゆる地道、まじめといったイメージを持たれがちですが、実際はそのようなことはなくどちらかというと体育会系、外科系の性格だと自分では感じる事が多いです。そのような自分がどうして腎臓内科を選んだと言えば正直なところ、きっかけは実家が透析クリニックであったからということになります。透析といえば腎不全、それであれば腎臓の内科が良いのではないかと、という曖昧なイメージで信州大学第2内科腎臓部に入りました。実際に臨床の現場で働くと以前のイメージと大きくかけ離れていました。透析室の休憩室でお茶を飲んでいれば1日

が終わっていくのでは……などととんでもない想像をしていたのですが、実際はとにかく忙しかかったです。検尿異常の慢性腎炎の患者さんの腎生検を行い、病理から治療方針を検討する傍ら、急性血液浄化の依頼が舞いこみ、そして午後はシャント手術に明け暮れ、夜は透析患者さんの急変に対処するといった具合に1日が過ぎていきます。腎臓内科を選択して良かったか?自問する余裕もないまま、時間が過ぎて行った気がします。ただ今回『私がなぜこの科を選んだか』というタイトルで改めて腎臓内科を選んだことを振りかえてみると『腎臓内科で良かったかな』という気持ちになります。ブラックジャックやドラマ医龍のような派手な場面はあまりありませんが、検尿異常や早期の慢性腎臓病患者さんの治療からはじまり、末期腎不全期、透析導入期そして最後の看取り。このように患者さんとの人生にダイレクトに関わってともに時間を過ごしていくことが腎臓内科医の醍醐味ではないでしょうか。大学 duty は終了しましたが、医師人生は始まったばかりでまだまだ経験不足や修行不足を痛感することが多いです。開業してもたくさんの専門症例に当たれるのも腎臓内科の魅力ともいえますので、今後も多くの患者さんに出会い腕を磨いていきたいと思っています。

(日大平12年卒)